

【追想】

## 村上淳一先生追悼

鈴木 直志

村上淳一先生の訃報に初めて接することができたのは、1997年に私が桐蔭横浜大学に赴任した直後である。桐蔭法学部はこの時、設置年度を終えて五年目を迎えており、村上先生はちょうどこの年に新学部長に就任されていた。したがって、先生と私は学部長と新任教員という立場で面識を持ったのだが、その時の緊張は今でも忘れることができない。

先生の『近代法の形成』（岩波全書、1979年）や「国家の概念史における帝国と領邦」（吉岡・成瀬編『近代国家形成の諸問題』木鐸社、1979年）といったご著書や論文は、私が携わるドイツ近世史研究において必読の先行研究であった。赴任前は大学院生だった私にとって、村上先生はこれらのご著書を通してのみ知る法制史の大家であり、まことに雲の上のような存在なのであった。その先生が突然、桐蔭法学部でともに仕事をする研究者・教員として身近な存在になられたのである。これが驚かずにいられようか。緊張せずにいられようか。

もとより、先生と私の間に事前の接触点がまったくなかったわけではない。それは、O・ブルンナー『ヨーロッパその歴史と精神』（岩波書店、1974年）とF・ハルトゥング他『伝統社会と近代国家』（岩波書店、1982年）という二つの研究書を通じてのご縁である。これらはドイツ中近世史の錚々たる専門家たちによる共訳書で、村上先生も無論その中に加わっておられたのだが、ここに名を連ねる訳者の平城照介先生、ならびに阪口修平先生が、中央大学文学部での私の直接の恩師なのである。私はこの二人の先生方から、村上先生のことについて（そして、翻訳検討会の緊張感ある厳しい雰囲気

ついても) 時々お話を伺ったことがあった。また村上先生からは、初対面時に「平城先生の息のかかったあなたをお迎えできて嬉しい」とのお言葉をいただき、身が引き締まった記憶もある。

桐蔭時代、村上先生は鶴川学長の信厚く、長く学部長の任にあたられた。こうした事情もあり、残念ながら先生から研究上のご指導を賜る機会はほとんどなかった。ただ、先生がわれわれの依頼をお聞き届けくださり、2009 年に一度だけメモリアルライブラリで講演いただいたことはよく覚えている。それは、ライブラリの一面にびっしりと配架された村上寄贈文庫と同様、迫力ある内容であった。

もう先生にお目にかかれなと思うと悲しみに耐えない。今はただ心から先生のご冥福をお祈りするのみである。

(すずき・ただし 中央大学文学部教授  
元桐蔭横浜大学法学部教授)